

(別紙 1)

論文の内容の要旨

論文題目：ディオニュシオス・アレオパギテースの神化論

氏名：袴田 渉

本論文は、5世紀末から6世紀の初めにかけての地中海世界東部に出回り、今日の学界で偽書とされる一連の著作群、『ディオニュシオス文書』（以下、『文書』と略記）において語られる「神化」という言葉の意味内容を理解し、そこに一つの解釈を加えようとする試みである。そこで採られた読解の方途は、一つには、『文書』を歴史的な文脈に置きなおして、そこから見えてくる事柄を手掛かりに読むこと、いま一つには、同書中の「神化」にまつわる鍵語を探り出し、その独特な使用法から明らかになる神化の諸相に眼を凝らすことである。

こうした方途によって明らかにされるのは、古代末期のキリスト教の周縁部にあつて、新プラトン主義との狭間で、自らの「信」や経験を言語化すべく、言葉と格闘する著者の姿である。『文書』の著者ディオニュシオスは、先行するギリシア教父たちの伝統的な語彙に全面的に依拠するのではなく、当時の一大思潮であつた新プラトン主義の語彙をも用いつつ、それを独自にキリスト教的な意味内容をもつ言葉へと鑄なおし、自らの「信」を語つたのである。本論文で採り上げた οὐσιωθῆναι や ἐκθέωσις、ἀφομοίωσις といった術語は、彼のそうした思考の足跡がはっきりと刻み込まれた言葉たちである（本論第1部第1～3章）。

例えば、οὐσιωθῆναι（ギリシア語で「存在を与えられること」の謂）はディオニュシオスにおいて、単に新プラトン主義的な「発出」の類義語であることをやめて、「私たちに即して (καθ' ἡμᾶς)、私たちから (ἐξ ἡμῶν)」という表現を伴うことによって、神と人間のそれぞれが起点となる、キリスト教の「受肉」の出来事を表す言葉となり得ている。そして、この言葉の考察によって明らかにされる神人の相互性や協働性は、「神化」の事態にも見出されるものであり、その特質をなすものである。

また、彼の ἐκθέωσις（「神化」を表す新プラトン主義の用語）は、後期新プラトン主義を代表する哲学者プロクロスのように「存在」や「知性」といったイデア的存在者たちのオリュンポスの神々との同一視を表すのではなく、人間の神への回心・振り向きによる「還帰」的な働きであり、神からの一方向的な働きかけに終始しない、人間の側の主体性を孕む神化のあり方を表す語である。

そして、ἀφομοίωσις（「類似」を意味する ὁμοίωσις と同根の語）は、存在階層の上位者（類似の対象）と下位者（類似する者）の二者間において生起する事柄ではなくして、「神との類似」であると同時に「神の再現」をも意味することによって、第三者に係わる。従つ

て、「神との類似」を要件とする神化は、「神」と「神化される者」の個人的な関係においてではなく、神を再現して「他者」に働きかけることで成立する、三者間の協働による事態なのである。また、本論文において、同語は、神化の現成する「場」が「ヒエラルキア」（ディオニュシオスの造語で、神との協働が実現される位階秩序）であることが明らかにされている。そして、ヒエラルキアはそれを構成する者たちの間で、儀礼等の活動を通して断絶なく相互に作用しあう仕組みをもつ故に、一人の神化は、一人の神化に留まることなく、他者の神化につながり、天使の神化につながる、というように絶えず循環していくことも指摘されている。

以上のようにキリスト教と新プラトン主義の狭間から発せられたディオニュシオスの言葉は、キリスト論争やオリゲネス主義の断罪といった状況下で、ある体系化された「語り」のかたちをもった。それが「肯定神学」や「否定神学」と呼ばれるものであり、本論文で「エロス論」と言われているものも、この肯定神学に属する「語り」である（本論第2部第6章）。それらは、「神」の存在構造を言語・理性において把握し語る時代の趨勢に抗するように、神という知解を超えるはずのものが、そもそも人間によって言語化され、或いはある種の「出会い」や「合一」のかたちで人間に経験されるのはなぜなのか、という問いの中で成立している。そして、それらは「神語りの方途」であると同時に、神化の方途でもあった。

例えば、「肯定神学」とは「神の名づけ」の実践であり、それは受肉のキリストを根拠としつつ、神名を「像」として措定し、その「像」に基づいた神名の生成場面の「想起」と神への「祈願」^{エピクレシス}によって、聖書に込められた父祖たちの「神の力の経験」を再生しようとするものである（同部第4章）。そして、このような神名に基づく神の力との出会いの想起と、祈願による神の力の経験ないし「分有」は、神化の要件を成す「神との類似」が生起するための契機となるのである。

これに対して、「否定神学」は、やはり「祈り」に拠りつつ、今度は神名の「像」を否定することで神を讃美しながら、自らの魂を神へと上昇させ、ついには認識論上の主体と客体を離れた主客未分の境、自己意識の成立以前の「暗黒」の中へと這入ろうとする、魂の道行きである（同部第7章）。そこでは、暗黒に這入る際に、主客を離れることで自己否定を行う人間と、その人間に自己を「合一する」ことで、やはり自己の絶対超越性を否定する神との一致という、神人の協働による出来事が生起する。そして、このような否定神学の道行きを、ディオニュシオスは『出エジプト記』における、モーセのシナイ山登攀の記述に重ね合わせて提示している。ディオニュシオスはそこで、モーセが自らを浄め、他の祭司たちを率いてシナイ山に登りゆき、その途上で神的光による照明を受けて、山頂において完成に到ることを示しているのである。このことは、ディオニュシオスの描くモーセが、「ヒエラルキア」において司祭たちと共に「儀礼」を執行しようとする「大祭司」に擬せられていることを暗示している。というのも、ディオニュシオスにとって、「浄化」・「照明」・「完成」とは、まずもってヒエラルキアにおける儀礼の原型を示すものであり、自ら「浄化」と「照明」の段階を経て、「完成」の境位において祭司（ないし司祭）を率いるのは、大祭司に固有の所作だからである。従って、ディオニュシオスは、否定神学の営みを、肯定神学と同様にヒエラルキアの内部でなされることとして示していると同時に、何らか儀礼との関わりにおい

て構想していると考えられる。このことは、否定神学による「神との合一」に到る過程が、神と神学を行う者との排他的な二者関係において進行するのではなくて、むしろヒエラルキアの只中において、他者との協働において遂行されるものであることを示唆する。

そして、そのような否定神学において神と人間の合一が生起するその動因は、ディオニュシオスにとって「エロス」にほかならない。「エロス」とは、ここでは単なる「性愛」や「恋愛」の意味ではなく、神においては万物の創造を促し、万物を求める「愛」であり、人間においては神を希求し、自他を救済する「愛」であって、ディオニュシオスが、かつて途絶したオリゲネスらのエロス理解の伝統に基づいて、神的愛としての「アガペ」と同一視したものである。ディオニュシオスはそのエロス論の中で示した、「真に愛する者」の範例とも言えるパウロの言葉、「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」とは、神化の「事情」を表すものとして捉え返すこともできるだろう。なぜなら、しばしば「神の如き」と評されるパウロは、彼の弟子を自認するディオニュシオスにとって、神化した人間の範例でもあるからである。この意味で、「エロス」によってこそ、神と人とは互いに自己を否定して、合一することができるのであり、神化の事態が成立しうるのだと言える。

このような、神化の道行きとしての生、即ちキリスト教徒の生は、ディオニュシオスにとって「闘い」ないし「競争」であり、死はその闘いの「終わり」、競争の「ゴール」を意味する（同部第5章）。ここで、ディオニュシオスが死を、何らか生を妨げる消極的なものとして捉えるよりも、むしろ積極的なものとして意義づけているのは、彼において死は、死後の身体の「復活」を伴う、新たな生の「始まり」の契機として想定されているからである。この時、そのような「闘い」の生を生きる主体として考えられているのは、キリストを範例とした、魂と身体とが「二つで一つ」となっているあり方をした、「全き人間」である。そして、そのような人間の救いは「全き救い」と言われるのであり、このことは、人間の神化というものが、身体を伴ったものであることを示している。身体の所作を伴う儀礼論を中心とした『教会位階論』において、とりわけディオニュシオスの神化論が展開されていることは、その証左である。

こうして、死をもって「終わり」に到る神化の道程は、「復活」をもって新たな「始まり」を迎える。その際、死は、たった一度きりの「終わり」であるよりも、むしろ神化の道行きの様々な局面にその姿を現す。例えば、「闘い」としてのキリスト教徒の生の「始まり」を告げる「洗礼」において、人はまずそれまでの生に「死ぬ」という時。或いは、「真に愛する者」であり神化した者の範例であるパウロが、自らを「脱自」しつつ、「生きているのは、もはやわたしではありません」と言う時。これらの死は、勿論、生物学的な意味での死を示しているのではなく、主語的な「私」の死、ないし放棄を意味する。そのような「死」は、「脱自」を通して、神の臨在する「暗黒」や「キリストの生命」といった「根拠」に立ち返ることで、より根源的な自己を獲得する契機となる。そうした意味での死を内包した生、生から死へ死から生へと躍動的に変貌を繰り返す人間のあり方を指し示すものこそ、ディオニュシオスの語る「神化」にほかならない。